

# Instructional Rounds の日本における試行と評価

廣瀬 真琴\*・森 久佳\*\*・宮橋 小百合\*\*\*

(2018年10月23日 受理)

## A Case Study of Instructional Rounds in Education in Japan

HIROSE Makoto, MORI Hisayoshi, MIYAHASHI Sayuri

### 要約

本研究では、「専門的な学習共同体」(Professional Learning Community)のネットワーク型である Networked Learning Communities の新展開として諸外国で台頭してきている営みである Instructional Rounds (以下、IR とする) に着目し、その、わが国への導入可能性について検討した。

国内の公立小学校を舞台に IR の営みを試行し、参加者にアンケートとそれに基づくインタビューを行った。その結果から、IR の営みが有する「他校の教師や行政と学校を巡り学び合う活動」「地域(学区)の教育課題と学校の課題を繋げた観点設定」「教師・子ども・内容という授業の事実の収集」「複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル」「IR の授業分析(事実に基づいた分析)方法」「展望の検討方法とその提案」の6点は、我が国の教師にとっても親和性が高く、導入しやすいものであることが確認された。また「複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル」以外は、導入する必要性が高いことが、本試行により確認された。

**キーワード:** Instructional Rounds, 授業分析, 専門的な学習共同体, Networked Learning Communities

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

\*\* 大阪市立大学大学院 文学研究科 准教授

\*\*\* 和歌山大学 教育学部 准教授

## 1. 専門的な学習共同体のネットワーク化

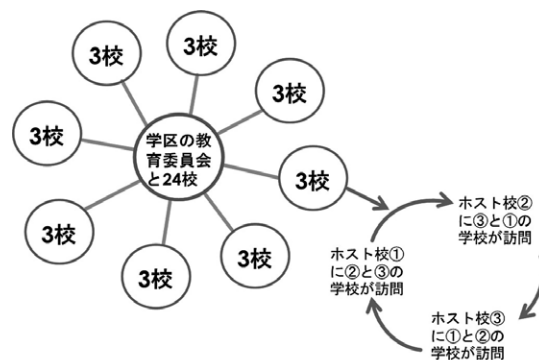
近年、欧米諸国や我が国において、「専門的な学習共同体」(Professional Learning Community, 以下、PLC と表記)に関する理論及び実践的研究が展開されている。子どもの学力向上に対する社会的圧力の高まりへの対応として、PLC は、教師が専門性の高い学習を繰り返し広げるための共同体を形成し、集合的な知恵の創出を企図する営みとして位置づけられている(千々布 2014)。つまり PLC は、教職員の学習と職能成長を不断に促進する、探究のためのコミュニティ(共同体)である(木原他 2013)。基本的に、PLC は、単独の学校をベースに構築されるものであるが、その探究は、PLC のネットワーク化によって人的資源面から拡充しうる。ネットワークを「強力な組織的ツール」(Katz, Earl & Jaafer 2009)として捉え、ネットワーク化された学習コミュニティ(Networked Learning Communities, 以下、NLCs とする)の形成が、欧米では広がりつつある。

NLCs により、単独の PLC よりも一層豊かな「集合的知恵(Collective Wisdom)」が創出・蓄積され、それがメンバー間で共有される。同時に、NLCs は、すぐれた授業等を、単独の学校を超えてより広いネットワーク的組織の共有財産とし、それを普及させるという機能をも果たす。言い換えれば、NLCs の発想は、ともすると学校内の固定的なメンバーや、外部から閉ざされた組織体制で、学びあう内容に偏りや停滞感が生じ、教師が学び続けることが困難になっていくといった課題を抱えた PLC を、維持しないし持続的に発展させる上で、有益なものである(森 2012, Jackson & Temperley 2007)。

また、日本でも、学校の小規模化や義務教育学校等、学校間連携によって教師が専門的な学習を展開する必要性が、高まってきている。学校の小規模化は、子どもたちだけではなく、教師たちにとっても、学び合う相手が校内に乏しくなることを意味するためである。

さて、NLCs の新展開として諸外国で台頭してきている営みの 1 つが、Instructional Rounds(以下、IR とする)である(廣瀬他 2015)。IR は、日本の校内研修で普及し始めている参加型授業研究と親和性が高いと考えられる。詳細は後述するが、図表 1 のように、IR は、ネットワークを形成した学校が、互いに訪問しあう(廣瀬他 2015)。ホスト校で提供される授業を、他校の複数名のゲスト教師がチームを組んで、観察する。その記録を附箋に書きお越し、それらを整理・分析するといった、いわゆる参加型の授業分析を行っているためである。IR の営みに対して我が国の教師たちは、親和性が高い可能性があるが、それを検証する研究は進められてはいない。

そこで、本研究では、IR の我が国への導入可能性について明らかにすることを試みるものである。



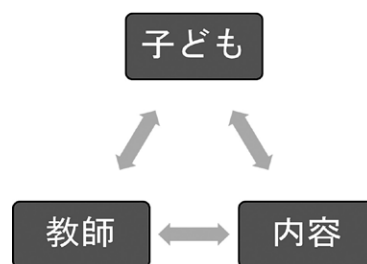
図表 1 IRのネットワークの例

## 2. Instructional Rounds (IR) のシステム順

IRとは、学区の教育委員会がイニシアチブを発揮し、学区全体の学校を巻き込みながら、教育の改善を図る営みである (City et al. 2011)。教育委員会と数多くの学校がネットワークを組み、チームを構成 (3~4校/チーム) する。例えば、学区内に24校あれば、8チームが編成されることになる。IRでは学区の共通課題が設定される。これに基づきながら、各学校が、自校の実践上の問題を具体化することになる。チーム内で相互に学校を巡回し、共通課題に対して授業の改善を検討しながら学びあうネットワークを構築する。

### 2.1 授業分析に関するシステム

チーム内の学校は順番にホスト校となり、ラウンドメンバーに複数の授業を公開する。ラウンドメンバーは、他校の教師や管理職、行政から構成され、彼らが授業を観察し、その結果をホスト校に伝え、今後の改善策について提案する。授業観察は、インストラクショナル・コア (Instructional Core)、つまり、ある授業内容のもとに展開された生徒の活動と教師の言動、それらの相互作用に注目して行われる (図表2)。子どもたちが何を行っているのか、教師が何を行っているか、といった事実を記録する。



図表2  
インストラクショナル・コア

また、ラウンドメンバーは、ラウンドでの学びを自校に還元する。行政関係者は、各チームの改善の営みから学ぶと共に、そこでの学びを学区に持ち帰り、学区全体の教育計画にそれらを反映することが期待されている。IRの基本的な手順は、訪問前 (Before)、訪問時 (At)、訪問後 (After) の3段階に分かれる (City et al. 2011)。

訪問前は、学区の共通課題に基づき、各学校は自校の実践上の問題を具体化しておく。各学校はこれまでの自校の取り組みを振り返り、生徒に関するデータを確認し、期待したほどには効果の得られなかった指導等を整理しておく。訪問当日は、授業観察の前に、ホスト校からラウンドメンバーに対して、実践上の問題について説明がなされる。ここでは、資料に基づきながら、問題の所在やその改善の現状、行き詰っている点などが伝えられる。次に、実際に授業を観察する際の活動について説明する。ラウンドメンバーは、グループで行動する。グループごとに、各授業を20分ほど観察する。観察後、ラウンドメンバーは、授業の分析や改善点の検討を行う。図表3は、観察から授業の分析、展望の概要である (Teitel 2013, pp.12-17)。

訪問後は、ホスト校や教育委員会は、ラウンドメンバーから提供された分析や展望を活用していく。具体的には、それらを活用し、既存の学校の営みを修正したり、新たな計画を追加したりしていく。また、観察したラウンドメンバーは、自分たちが学んだことを自校にどのように還元できるかについて議論する。また、ラウンドメンバーは、訪問後に開催される会議にて、自分たちの学びを自校 (学区) にどのように還元したかについて、簡単に報告することが期待されている。しかし、提示された展望の通りに、ホスト校が事項の取り組みを改善させることが義務付けられてはいない。

図表3 当日の活動内容

1.記述 (Description)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・事実に基づいた記述を行う。感想や、評価、推断をしない。</li> <li>・実践上の問題に関連すると考えられるデータ (記述) を選ぶ。</li> <li>・データを附箋に書き出し、グループ内で共有する。</li> <li>・メンバーは附箋を確認しあう (内容が実践上の問題に沿っているか、評価的 (価値判断的) になっていないか)。</li> </ul>
2.分析 (Analysis)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観察した授業に、パターンが存在していないかを分析する。複数の授業において気が付いた点に、附箋は集約されていく。</li> </ul>
3.推測 (Prediction)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の言動と子どもたちの学習を繋げて考える。そのために、ラウンドメンバーは、子どもたちの立場になって思考する。例えば、「もし自分が子どもであるとして、上記のパターンが与えられたとしたら、何を知り、何ができるようになるだろうか?」といった思考である。</li> </ul>
4.展望 (Next level of work)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パターンや推測を基に、展望 (改善策や必要となる支援等) をホスト校に提示する</li> </ul>

### 3. Instructional Rounds (IR) の親和性に関する検討

#### 3.1 試行の概要

今回試行の舞台となるホスト校は、X県にある公立のY小学校である。創立139周年(2015年度時点)を迎え、教職員数約40名、児童数約600名である。試行の実施日は、2015年7月6日である。

##### 3.1.1 IRの参加者とその役割

IRには、他校の教師や管理職、行政が、ホスト校に赴き、授業観察に基づいた展望の提示を行う。しかし、試行の段階において、他校の教師を実際に招くことは困難であった。そこで、今回は、他校の教師や管理職の役割、行政関係者の役割を果たしうる5名の人物に、協力を依頼した。具体的には、小学校教員2名、中学校教員2名、行政関係者1名である。ただし、小学校教員と中学校教員の4名は、調査時は人事交流の一環として大学に派遣されており、調査時の身分はX大学の教授及び准教授であった。彼らは3年間の任期で派遣されており、任期終了後は、再び学校現場に戻るため、他校の教師や管理職役を果たすのに適していると判断した。また、行政関係者のK氏は、X県の総合教育センターに所属する、現職経験を有する研究主事である。研修の企画運営等を担う部署に在籍しているため、今回の試行で行政関係者役を果たすのに適していると判断した。5名とも研究主任を務めた経験を有しており、3名は管理職経験を有している。

なお、この他に、ファシリテーター1名(共同研究者Z氏)が参加者に説明を行い、記録者2名が、ラウンド中にビデオや写真の撮影を行った。Z氏は、事前に、IRのファシリテーター

用テキスト（Fowler-Finn, 2013）を読解している。また、参加者の議論の誘導を避けるために、後述する参加者への質問内容を、施行前に Z 氏に伝えていない。

### 3.2 試行の全体像と活動内容

試行は、基本的には、上述した IR の手順に則って行われた。以下は、試行の具体である。

#### 3.2.1 訪問前の活動

IR では、訪問前に、学区共通の課題に基づきながら、各学校が自校の実践上の問題を具体化する。今回の試行では、ホスト校（Y 小学校）が事前に、自校の研究活動の中で、学力について県の教育課題と自校のテスト結果等を分析し、実践上の問題を策定していたため、それを活用している。当該県では、全国学力・学習状況調査の結果を踏まえ、活用型学力の育成を課題として挙げている。そうした県の課題や自校の分析を踏まえ、Y 小学校では、思考力・判断力・表現力の育成に、学校全体で取り組んできている。また、毎年、その成果を公開研究会で公表し、参加者から広く批評を仰いでいる。

今回の試行段階で、思考力・判断力・表現力の育成について、ホスト校は、実践上の問題 I を、「子ども同士で思考をつなげて、新たな考え方を見出していけないことがある」とし、「子ども同士が集団の中で思考をつなげていけるような手立てが必要」という解決の仮説を立てていた。実践上の問題 II を、「協同的な学び合いのなかで、どのようにすれば子どもたちの考えが強固になったり、変化・付加されたりするのか」とし、「子どもたちの思考のプロセスを明らかにすることで、子どもたちの思考力・判断力・表現力を育める」といった解決の仮説を整理していた。

なお、その後、5名の参加者に対して、学校の実践上の問題や IR の活動手続きについて資料を配布し、筆者が、その内容を説明している。

#### 3.2.2 訪問当日の活動

図表 4 は、訪問当日の活動の概要である。図表 3 で示した IR の活動の流れを踏まえている。なお、各段階の活動時間については、先行研究に示された IR 事例を参考にし、ホスト校や参加者の都合を踏まえて、調整を行った。

図表 4 訪問当日の活動

段階	手順	備考
ミーティング (35分)	① ホスト校の実践上の問題について書かれたファイルや研究紀要を各自が読む ② IR の手順を確認 ③ 実践上の問題について確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自がラウンドの手順、学校のプロフィール、実践上の問題を確認</li> <li>具体的に観察事項を記述するよう確認</li> <li>インストラクショナル・コアに注意を向けることを確認</li> </ul>
授業観察 (90分)	④ 2チームで、1学級につき20-25分の観察を計4回行う	<ul style="list-style-type: none"> <li>実践の観察では、解釈や評価コメントではなく、実際に起こったことを記録</li> </ul>

記述 (60分)	⑤ 各自が教室で得た観察記録を附箋に書く ⑥ 学級ごとに、時系列で、ポスター用紙に附箋紙を張る	・ 参加者たちは各々、記録を見返して、付箋に書き写す
分析 (50分)	⑦ ポスター用紙の周りに集まり、附箋を確認・分類する ⑧ カテゴリー名を議論する	・ 観察記録を持ち寄り、実践上の問題と関連する附箋を選択する ・ 授業ごとに、時系列に附箋を貼りだす ・ 授業を横断したパターンを見いだす
推測 (25分)	⑨ 推測する	・ 子どもの学びについて推測する ・ 特定の学級ではなく、見出されたパターンに基づいて推測する
展望 (60分)	⑩ グループでホスト校の向上のための提案をする ⑪ 提案に対するホスト校のコメントをもらう	・ 「この学校は次に何をすべきか？誰がいつすべきか？」等について話し合う ・ メンバーが質問紙に答えたり、近くの人と話をしたりするなどして、訪問で学んだことを各自が振り返る

授業の概要は、図表5の通りである。IRの手続きに則り、グループ単位で異なる学級に赴き、前半と後半で、入れ替わった。観察対象となる授業については、ホスト校に一任し、同校が目指している思考力・判断力・表現力の育む班活動の場面がある授業が見学できるように、依頼した。同校に来て1年目の比較的キャリアの浅い教師たちの授業であった。

図表5 授業見学コースと時間の目安

グループ	1時間目		2時間目	
	前半 (09:45-10:05)	後半 (10:05-10:30)	前半 (10:40-11:00)	後半 (11:00-11:25)
A	3年Z組 (社会)	6年Z組 (算数)	2年Z組 (算数)	5年Z組 (理科)
B	6年Z組 (算数)	3年Z組 (社会)	5年Z組 (理科)	2年Z組 (算数)
授業の概要	算数：曲線のある図形の面積の求め方。	社会：市の特徴を地図から読み解き共有。	理科：顕微鏡の操作方法の学習。留意点を確認し、班活動。	2年算数：長さ比べ。3角形の辺の長さを比べる。

インストラクショナル・コアに注目して各授業を見学した記録を各自が読み返し、附箋に書き出した。それをA0用紙に授業別に時系列で張り出し、事実の確認と共有を行った。

その後、参加者全員で学校の実践上の課題に関する附箋を授業横断的に抽出・分類し、授業のパターンを見出した。そして、見出されたパターンに名称を付けた後、そのパターンで子どもは何を学ぶかを想像しながら、それがもたらす問題点について考察した。展望のフォーマットに則って、パターンごとに、ホスト校への展望を取りまとめた。授業で確認されたパターンを紹介し、それを基に、短期・長期の視点で、学校側に展望を伝えた。

最後に、パターンと展望を Y 小学校の研究部（3名）に示した。質疑応答を行い、学校側から展望に対するコメントを得ている。

### 3.3 親和性に関する検討

参加者に対するアンケート及びインタビューを実施した。先行研究（Teitel 2013 等）から、IR の 6 ポイントを取り上げ、質問内容を構成した。それは、「他校の教師や行政と学校を巡り学び合う活動」「地域（学区）の教育課題と学校の課題を繋げた観点設定」「教師・子ども・内容という授業の事実の収集」「複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル」「IR の授業分析（事実に基づいた分析）方法」「展望の検討方法とその提案」である。各ポイントに、3つの評価観点（必要度・導入しやすさ・改善の必要度）を設定した。各観点に 5 段階の評定尺度を設けた。小学校ペア、中学校ペアは、個人の評価結果を共有して、最終的な評価を回答している。なお、インタビューで語りながら、アンケートの回答を加筆したり、書かれていない点を加えて語ったりすることを、了承している。

図表 6 は、IR の導入について、導入する必要性、導入しやすさ、その際の改善の必要度に関する参加者の評価結果である（小＝小学校、中＝中学校、行＝行政）。導入する必要性としやすさについては、5 が最も高く、1 が最も低い尺度での回答であり、改善の必要度は、1 が最も高く、5 が低いという尺度での回答である。

下線部は、期待値を下回った点である。表を概観すると、全体的に IR の 6 ポイントが、参加者に支持されたことがわかる。IR のコンセプトが、参加者に受け入れられたと言えよう。とりわけ「教師・子ども・内容という授業の事実の収集」については、「導入する必要性」と「導入しやすさ」が、ともに全て期待値 3 を上回る結果となった。

図表 6 導入に関する評価結果

問	ポイント	導入する必要性	導入しやすさ	改善の必要度
1	他校の教師や行政と学校を巡り 学び合う活動	小:5,中:4,行:5	小:4,中:3,行:4	<u>小:2,中:2,行:2</u>
2	地域（学区）の教育課題と学校 の課題を繋げた観点設定	小:5,中:5,行:5	小:4, <u>中:2</u> ,行:3	<u>小:2,中:2,行:2</u>

3	教師・子ども・内容という授業の事実の収集	小:5,中:4,行:5	小:4,中:4,行:5	小:1,中:3,行:4
4	複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル	小:3,中:3,行:3	小:4,中:4,行:3	小:3,中:3,行:2
5	I Rの授業分析(事実に基づいた分析)方法	小:5,中:4,行:4	小:2,中:4,行:3	小:2,中:3,行:2
6	展望の検討方法とその提案	小:5,中:4,行:4	小:4,中:3,行:3	小:1,中:3,行:2

一方で、課題も示された。図表7は、評価の低点(2以下)に対する参加者の語りの概要である。

図表7 評価の低点に関する参加者の記述及び聞き取り結果の概要

問	導入しやすさ	改善が必要な点
1		小[A 事実の認識をどう進めるか, B 学校の取り組みとの関連を図る] 中[A 半日程度での実施が望ましい] 行[A 学校長のリーダーシップと理解が重要]
2	中[地域(学区)をどの範囲にするか]	小[C 観点の設定に多くの人に関わり, 共有していくことが重要] 中[B 行政の役割が重要, C 市町村教委の理解が必要(具体的なIRのプロセス等の情報提供)] 行[B 参加校の確保が必要(近隣の学校同士で行えると共通点がある可能性が高い, 小学校なら中学校区で行えば課題を共有しやすい)]
3		小[D 記述のトレーニングが必要, E 学校の課題解決に繋がる見方ができるかどうか重要, F 客観的に観察できるか]
4		行[C 山場を見たいといった観察者のニーズをどうするか]
5	小[検討の過程で妥協が起こる可能性]	小[G 日本の教育文化を考慮する] 行[D 時間の管理が必要(大規模校だと行いやすく, 小規模校だと教員が動きにくい)]



6	<p>小[H 展望が観念的にならないように、資源や支援が具体的になるような話し合いが必要]</p> <p>行[E 立場を超えた率直で民主的な議論となるにはファシリテーターの力が重要、F 展望を述べる経験が乏しい教師が多い]</p>
---	---

### 3.3.1 導入が困難な点

まず、導入が困難な点については、評価結果（図表6）を見ると、あまり回答されていない。学校がチームを組む際、どの範囲で地域（学区）を設定するかが重要となるため、導入に際してその検討が必要である（中）との意見が寄せられた。「市町村レベルなのか、それこそ旧合併前の少し小さな市町村レベルなのか」等、地域（学区）のサイズが重要となることが指摘された。実際に、我が国に IR を導入する際、とりわけ中学校においては、課題や地域（学区）の特色において共通点を有する学校同士であるかどうかを指標に、チームの編成を図る必要があると考えられる。

また、検討の過程で妥協が生じる可能性が示唆された(小)。この点については、インタビューにて、「今回が初回であったことが大きい」と述べられた。回数を重ねて、「率直な関係性が重要だということと、意見がもし割れたときには、割れましたというのが率直に表現できる」ようにする必要があることが語られた。IR の導入においては、ホスト校の改善という目的を共有し、互いの意見を述べあえる民主的な議論の運営が重要となる。

### 3.3.2 改善が必要な点

次に、改善が必要な点について検討する。集約(重複有, 二重下線部)すると、時間面の改善(中 A, 行 D), 教育委員会や学校長のリーダーシップの重要性 (小 AC, 中 BC, 行 AB), 既存の営みとの異同の検討 (小 BG, 行 C), 参加者のトレーニング (小 DEFH, 行 EF) である。

IR を導入する際に、チームを組む学校間で、互いに訪問しあう日程を調整することが難航すると予想された。今回の試行は、一日をかけて行われたが、半日程度で展開できるように工夫することも、場合によっては必要となるとの回答もなされている。

こうした時間的な面も含め、教育委員会や学校長のリーダーシップが重要となるという指摘がなされた。今回は、県による学力調査の分析結果を踏まえて、ホスト校の実践上の問題が設定されていた。IR を導入する際には、地域（学区）の教育課題と学校の実践上の問題の設定に際して、それらをどのような資料や手続きで認定していくかについて、教育委員会と学校長との間で、合意が必要であろう。

また、学校で行われている研修内容や授業研究の方法との異同を確認する必要があると指摘された。IR の目的や手続きを理解する上で、参加者やホスト校にとって、これらの確認が重要となる。例えば、回答されているように、日本の授業では「やま場があり、それを見たい」とい

う参加者のニーズが存在することは、IRの導入に際して、十分に想定しうる。そうしたニーズに、複数の授業を半分ずつ観察し移動するIRのスタイルは、合致してはいない。しかし、「一つの授業を見続けると、フィルターができて、それが強化されて、事実を拾い集めるのが難しくなる」との声も寄せられている。IRの6つのポイントから考えるに、後者の指摘を、参加者に説明し、理解を得る必要がある。

更に、この点は、次の参加者のトレーニングと関連すると考えられる。IR参加者がこれまで取り組んできた授業観察や授業見学、助言のスタイルとIRの方法との間に相違が大きいほど、初めてIRに参加する前に、トレーニングが必要になるとの指摘である。参加者からは、日本で「指導主事経験があれば、たぶんゴールとしてはこういう指導を、こういう指摘をする、アドバイスをする「材料として、(授業において)こういうことがありましたよね」という見方とか、思考のプロセスがもう身につけてしまっていて、本当に純粋に客観的事実だけを集めるというのが意外と難しい」と語られた。事実に基づいた展望の提示についても、その経験を有する教師は少ないのではないかとこの指摘がなされた。この他、附箋の記述サンプル(良い例・悪い例)を示すことも、参加者からは提案された。「今は結構付箋とかに書くというのは慣れているかもしれませんが、記録を取るという習慣がなかなかない先生もいたりする。ですから意外とそこがすごく大事な導入のポイント」とであると語られている。

こうした指摘を踏まえるに、IRの導入に際しては、観察や記述の事前トレーニングを行う必要がある。実際、米国におけるIRにおいても、事前トレーニングの必要性が指摘されている。また、議論の進行を司るファシリテーターの役割やその重要性についても、知見が提示されている(Fowler-Finn, 2013)。

#### 4 議論と展望

本研究では、PLCのネットワーク化が求められつつある状況を踏まえて、米国で広まりつつあるIRが、我が国の教師たちにとって親和性がある営みであるかを検討した。その上で、導入に際して留意すべきポイントを、日本の参加型授業研究との異同を視点として、明らかにすることを試みた。

結果として、「他校の教師や行政と学校を巡り学び合う活動」「地域(学区)の教育課題と学校の課題を繋げた観点設定」「教師・子ども・内容という授業の事実の収集」「複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル」「IRの授業分析(事実に基づいた分析)方法」「展望の検討方法とその提案」の6点は、親和性が高く、導入しやすいものであることが確認された。また「複数の授業を半分ずつ観察し移動するスタイル」以外は、導入する必要性が高いことが確認された。

最後に、これは傍証になるが、今回の試行において、IRの意義が示唆されている。図表8は、試行その1に参加し、小学校・中学校・行政の役割を果たした教師たちが語った、彼らの学習事項及び自校や行政への還元事項の概要である。

図表8 導入意義の概要

	学習事項	還元事項
小 中	①小中連携を考える上で、地域性、地域課題、学校の課題を、授業と結びつけることが、非常に有意義であること ②仮説検証型ではないアプローチ ③事実の中から、自分が何を附箋に書くかに、自己の授業観が表れてくる ④地域（学区）の課題に関する部分を切り取る視点を、話し合ってみつける ⑤小中連携で使える方法を得られた ⑥分析、推測、展望の流れ ⑦教科の壁を超え誰もが参加し、話し合えるスタイルの研修方法	①4つの授業に共通したパターン ②展望で伝えた内容 ③学習目標の明確化や教材研究の内容 ④子どもの振り返り活動の意義 ⑤学習課題コンパクトにすること ⑥長期的に学年会等での進め方を共有する ⑦展望を話すことによって、自分たちの課題も浮き彫りになってくる ⑧言語活動の基盤となる教師の指導技術の重要性（観察力）
行	⑧分析から展望のプロセスで聞いた、他者の意見や考え ⑨単に自分の授業のことだけではなく、周りを広い視野で見て、学校全体の課題を探っていくスタイル ⑩協同的な問題解決の方法 ⑪議論しながらの類型化のプロセスで、学びが広がることがわかった ⑫学校の実践上の問題と事実との照合方法 ⑬実践上の問題から展望のプロセスまで、一貫性のある方法	⑨今回得た学び（表左）が、教師に重要 ⑩管理職が、他校の様子を直に見られる ⑪現場と同じ事実を行政も見ると、行政の取り組みにも説得力が生まれやすい ⑫行政と学校に連帯感が生じる ⑬インストラクショナル・コアで授業を見る見方 ⑭組織として学校を向上させる研修方法 ⑮客観的な第三者の意見の意義 ⑯学校を超えた課題意識を持った関与 ⑰現場に繋がりが生まれる（各学校の課題が繋がり、地区の活動が活性化する）

集約すると、学習事項は、IRのネットワークシステム（①⑦）、IRの授業分析方法（②④⑤⑥⑦⑨⑩⑫⑬）、自己理解の深化（③）、協同的な学びの重要性（⑧⑪）の3点になる。還元事項は、IRのネットワークシステムがもたらす効果（⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰）、IRの授業分析方法（⑨⑬）、ホスト校への展望内容（①②⑥）、見学して得た情報（④⑤）、個人的な思考内容（③⑦⑧）の5点になる。

今回、初めてIRの試行に参加したこともあり、学習事項と還元事項の両者において、IRの手法や効果についてのコメントが集中したと考えられる。しかし、参加者が経験豊かな教師たちであることを踏まえると、こうしたコメントの集中は、IRのシステムが、学校長や教頭の

管理職、研究主任等のリーダーとして、観察や分析等の学びをもたらす証左であると言えよう。この他にも、自己との対話が喚起されている（自己理解の深化）。同じ授業を観察し、共有された事実に基づいた他者との対話を通して、自己の授業を見る目が相対化されたと考えられる（協同的な学びの重要性に関する言及）。また、ホスト校への展望内容は、共通の課題に基づいたチーム校から得られた知見であるため、自校の実践を検討する観点になりうると語られた。そして、展望に関連せずとも、自己が見学して得た情報、参加しながら思考した内容は、共通課題に基づいているため還元しやすいと語られた。

こうした学習事項や還元事項を考えるに、地域（学区）の共通課題で結ばれた学校同士は、IRの手法によって、参加者を通して、自校に還元しやすい学びや情報を相互に得やすいと考えられる。

また、ホスト校に対する意義も、示唆された（図表9）。

図表9 見出されたパターンと展望及びホスト校からのコメントの例示

パターン	展望の概要	ホスト校からのコメント
ペア・グループワーク活動の意義・目的を理解させる	<p>&lt;短期的&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何のためのグループ活動か、ペア活動を子どもに明確に伝える（Ⅰ、Ⅱ）</li> <li>・グループ活動前の個人学習の際に、個々の考えを持たせる（Ⅱ）</li> </ul> <p>&lt;長期的&gt;（Ⅰ、Ⅱ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達段階に応じたグループ活動の在り方</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが自分の考えをもってグループワークに臨むことを、道徳では取り組み始めている。その方向性は間違っていないという手ごたえを得られた</li> </ul>
マイナス作用	<p>&lt;短期的&gt;（Ⅰ、Ⅱ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「違います」「同じです」という子どもの発言に対する教師の切り返し</li> <li>・そうした発言に、子どもを留まらせない</li> <li>・結果でなく過程を求める</li> </ul> <p>例) 私の答えではなく考えについてどう思うか？</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちに結果を早く求めすぎている</li> </ul> <p>&lt;長期的&gt;（Ⅰ、Ⅱ）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発達段階を意識し、子ども交流活動を考えていく</li> <li>・解決の見通し等、スタートラインを揃えない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども同士の思考の繋がりが生まれるという視点で考えていきたい</li> <li>・結果だけではなく、考えそのものについて子ども同士がやり取りするという指摘には、納得がいった</li> </ul>

\*表中（Ⅰ、Ⅱ）は、学校の実践上の問題番号

展望と学校が取り組み始めたことが合致していれば、学校の実践研究の方向性をエンカレッジすることが、ホスト校のコメントから読み取れる。

今後の検討課題としては、これらの意義を更に事例を重ねて確認しつつ、IRの実行に際して改善が必要な点について理論的・実践的研究を進めることにある。本研究の知見に基づけば、それは、活動時間の改善、教育委員会や学校長のリーダーシップの具体、参加者のトレーニングである。

### 【謝辞】

本研究に際し、多くの学校現場の先生方にご協力頂きました。武庫川女子大学の矢野裕俊教授、大阪教育大学の木原俊行教授、島根大学の深見俊崇准教授からは、貴重なご示唆を頂きました。ここに記して、皆様に厚く御礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- 千々布敏弥(2014)『プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティによる学校再生：日本にいる「青い鳥」』教育出版株式会社。  
 City,E.A., Elmore,R.F., Fiarman,S.E.,&Teitel,L.(2011). *Instructional rounds in education: a network approach to improving teaching and learning*. Harvard Education Press.  
 Cochran-Smith,M. & Lytle,S.L. (2009). "Practitioner Inquiry: Versions and Variance." In Cochran-Smith,M., & Lytle,S.L. (Eds.), *Inquiry as stance*. Teachers College Press. pp.37-59.  
 Foord,K., & Haar,J.(2008). *Professional learning communities: an implementation guide and toolkit*. Routledge.  
 Fowler-Finn,T.(2013). *Leading instructional rounds in education*. Harvard Education Press.  
 Hord, S. M., & Sommers,W. A.(2008). *Leading professional learning communities: voices from research and practice*. Corwin.  
 Hipp,K.K., & Huffman,J.B.(2010). "Diagnostic and Planning Tools." In Hipp,K.K. & Huffman,J.B.(eds.),*Demystifying professional learning communities*. R&L Education. pp. 43-56.  
 廣瀬真琴・宮橋小百合・木原俊行・森久佳・深見俊崇・矢野裕俊(2015)「新たな専門的な学習共同体のネットワーク化としての Instructional Rounds:授業分析に基づいた学区の教育及び学校改革」大阪市立大学教育学会『教育学論集』4, pp.17-29.  
 Jackson,D.&Temperley,J.(2007). "From Professional Learning Community to Networked Learning Community." In Stoll,L.,&Louis,K.S.(Eds.),*Professional learning communities: divergence, depth and dilemmas*. Open University Press, pp.45-62.  
 Katz,S., Lorna M., Earl,L.M., & Ben Jaafar, S.(2009). *How networked learning communities work, building and connecting learning communities: the power of networks for school improvement*. Corwin.  
 木原俊行(2006)『教師が磨き合う「学校研究」』ぎょうせい  
 木原俊行(2009)「子どもの成長・発達に資する小中連携」全国公立学校教頭会編『学校運営』第51巻第1号, pp. 12-15.  
 木原俊行・矢野裕俊・森久佳・廣瀬真琴(2013)「[学校を基盤とするカリキュラム開発]を推進するリーダー教師のためのハンドブックの開発:カリキュラム・リーダーシップの概念を基盤として」日本カリキュラム学会『カリキュラム研究』第22号, pp.1-14.  
 森久佳(2012)「カリキュラム開発の理論とモデル」木原俊行『学校を基盤とするカリキュラム開発を推進するリーダーのためのハンドブック:その理論と実践を学ぶ』, pp.3-20.  
 Roberts,J.E.(2012). *Instructional rounds in action*. Harvard Education Press.  
 Stoll,L.,&Louis,K.S.(2007). "Professional Learning Community: Elaborating New approaches." In Stoll,L.,&Louis,K.S.(Eds.),*Professional learning communities: divergence, depth and dilemmas*. Open University Press, pp.1-13.  
 Teitel,L.(2013). "Overview of Instructional Rounds: Practice, Impact, and Philosophy." In Teitel,L(Eds.), *School-based instructional rounds: improving teaching and learning across classrooms*. Harvard Education Press, pp.11-29.